

◆春期大会シンポジウム特集「アラブ音楽からみる世界」◆

前 言

二〇一九年六月二十七日の木曜日、早稲田大学戸山キャンパスで今年度の多元文化学会の春期大会シンポジウムが開催された。平日の、しかも午後六時十五分からという遅い時間帯に設定したのは、なるべく学生にとって来やすい状況を作りたいからだった。その甲斐あつてか、参加者の人数も多く活気がある中でシンポジウムを始めることが出来た。

このシンポジウムを企画するにあたっては、二つの目標を意識した。一つ目の目標は、「多元文化」という視点によってわたしたちの生き方や社会がどのように豊かになるのかを、参加者とともに考えるということである。筆者自身は中東・イスラーム文化プログラムを運営しているが、中東地域の社会やイスラーム文化だけでなく、他の文化圏やわたしたちの文化とも交錯する世界の多元性に光を当てたいという気持ちがあった。二つ目の目標は、こうした抽象的な話を、具体的な素材を通して多くの学生や参加者に肌で感じやすい形で示すことであつた。学術的な裏付けがある話を、分かりやすく、感覚的に消化しながら参加者と共有したかったのである。

こうした目標を密かに掲げたものの、筆者自身の研究でそのような高みに達する方法が見出せず、どうしたものかと試行錯誤している時に木村伸子氏と話をする機会があつた。中世アラブ史を研究してきた木村氏は、同時にアラブ・ヴァイオリンの演奏家でもある。しかも、アラブ音楽の構造、わたしたちが慣れ親しんでいる音楽とアラブ音楽がどのように構造的に違うのかを、ヴァイオリンを片手に、難しい数式も操りながら、何時間でも語ることが出来るという稀有な存在だ。何年も前に酒の席で教えて頂いた話を、ぜひ今度は多くの人にきかせて欲しい。アラブ音楽という視点から、わたしたちの世界がどう見えるのか。音楽によって多元的で立体的な世界を紡ぎ出して頂くために、木村氏とともにアラブ音楽を演奏して下さる打楽器奏者の専門家である高島拓也氏、さらに音楽と文芸批評、音楽文化論を専門とする本学教員の小

沼純一氏をお招きした。

本特集は、木村氏と高島氏による演奏、そしてお二人に小沼氏を加えた三人による音楽の解説と対談をまとめたものである。一定の編集を加えてはいるが、なるべくシンポジウム当日の息遣いが伝わるように心がけた。当日の三人による演奏と対談が、それ自体として一つの音楽となつてるように感じられたからである。

筆者自身は、音楽の演奏はもっぱら口笛とカラオケぐらいで、音楽についての体系的な理解もない。五線譜も読めない。しかしその筆者も、この日の三人のライブには強く引き込まれ、その時に聴いた音楽、考えた話、心で感じた波は今も心に鳴り響いている。わたしたちが生きている世界、物理的な存在としての世界だけでなく、心と知性の中にある世界観が、ある部分では時代や地域に特殊な構造を持ちながら、同時に別の部分ではそれぞれの社会を超えた普遍性を持っている。そのことを、体感的に再発見出来たシンポジウムであった。

最後に、本シンポジウムの企画、実施、さらにその後の本誌の編集に至るまでお世話になった多元文化論系室の佐藤晃氏、杉田貴瑞氏、寺嶋雅彦氏、さらに中東・イスラーム研究コース室の杉本悠子氏に深く御礼を申し上げます。

（文責…佐藤尚平）